

書かれたものと語られたもの ——「異重言語」で書かれたものにおける通訳・会話・固有名

申知瑛 (シン・ジヨン)

1. 書かれたものと語られた、その間の綻びた縫合。

二重言語で執筆した人々の作品を多数収録した雑誌『国民文学』は、「クンミンムナツ」と呼ばれたか、「こくみんぶんがく」と呼ばれたか、それとも「クオミンウェンシュエ(guomin wenxue)」とよばれたか。あるいは、ただ漢字表記としてのみ受け取られたか。このような疑問は、植民地期における二重言語使用者が参加した座談会録やかれらが書いた小説の会話文・固有名・呼称などを、例えば英語のような言語に翻訳しようとするとき、いっそう膨れあがる。漢字文化圏でのやり方なら、例えば日本語の文章なら「金史良(キムサラン・きむしりょう)」と一度表記すれば、同じ文章のなかでは以降ただ「金史良」という漢字を書けばよい。あえて発音まで明らかにしないでも済むことが多い。しかし、英語で書こうとすると、「金史良」という漢字表記で済ますことはできないので、文中で彼の名が必要になるたびに、その読み方を意識して書かなければならなくなるのだ。このように、人名・地名その他の固有名が漢字表記であるとき、それらの固有名は日本語・韓国語・中国語・民喃語など、どの言語の音で発話されたのかと戸惑ってしまう。とりわけ、多様な被植民者と被占領者が参加した植民地期の座談会に関しては、それが日本語で行われ日本語で書き残されたとしても、テーマや会話の相手、状況によって、様々な発音がそのつど飛び交っていた可能性を看過できない。植民地期の二重言語状況で書かれたテキストおよび解放期の多様な言語的混淆の中でハングルで書かれたテキストは、一見すると、書かれた言語と語られた言語の間に何の間隙もなく、うまく縫合されているかのように思える。しかし、書かれた言語と語られた言語との縫合(あるいは書かれたものによる語られた言語の縫合)、この間には何か隠された場面がある。書字言語のベースが漢字である東アジアでは特にこの縫合がなかなか現れにくい、会話的なテキスト(座談会・演説・大会などの記録、小説における登場人物の発話、通訳・翻訳の場面を読むとき、書かれたものと話されたものの縫い目に綻びが生じているのではないかと思わされることがある。

『三千里』は誌面で日本語が占める割合が次第に増えていき、1940年10月からは「国語版特集」という日本語の誌面が新設される。このように、『三千里』は同一雑誌を通じて朝鮮語から日本語への移行が明確に行われたために、通訳・翻訳の痕跡も比較的多く残した媒体である。例えば、同誌掲載の朝鮮語記事「朝鮮における諸問題の回想記、総督府の元高官の座談会」¹には通訳・翻訳に関する表示はないが、参加者のほとんどは在朝日本人である。当時の在朝日本人社会が朝鮮人社会と完全に分離されており、そこでは日本語が話されていたことを考えると、座談会で「話された言語」は日本語であった可能性が高い。他方、「八団体の幹部は語る」²は日本語記事だが、座談会参加者は朝鮮内の8官弁団体の幹部で、朝鮮人であった。日本語常用化が進められていた当時の状況を考えてみれば、この座談会は日本語で行われたと思われる。しかし、「國語の速記になれのせいで、甚だ拙い書振りになりました。文責は記者にあります。御寛容を願います—記者」³という座談会の附記が示唆するように、彼らが語った日本語もそれを速記した速記者の日本語も、ネイティブスピーカーのように正確ではなかったはずだ。さらにいえば、日本語で書かれつつも、実際の会話では日本語ではなく朝鮮語で語られたのではないかと感じられる微妙な部分もある。少なくとも、日本語で話した後、確認のために朝鮮語で繰り返しただろうと感じられる部分である。

発話と表記で使用言語が違っただろうと予測されるテキストが見つかるのは、植民地期のテキストに限られた現象ではない。解放後、書かれた言語は日本語から韓国語・ハングルへと変化するが、そうなるからのテキストにも日本語・中国語・漢字・英語の痕跡がある。このように、書かれた言語

¹ 「朝鮮における諸問題の回想記、総督府の元高官の座談会(朝鮮 諸問題の 回想記, 總督府 前高官 座談會)」『三千里』1938.1、5頁。

² 「八團體幹部は語る—新しき‘化團體’の動き」『三千里 國語版』1941.4

³ 同上、74頁。(原文の再確認ができない状態です、締め切りのためひとまずお送りします。報告時までには確認しておきます—筆者)

と語られた言語の間に生じた亀裂に注目すると、民族間・階級間・状況別の差異、言語内的な差異（文字と音声、文語と口語、沈黙と発話、品詞の差異など）、時代別の変化など、より多層的な権力関係によって変動する「二重言語」状況があることに気づく。つまり、植民地期および解放直後の「二重言語」的状況は、日本語と朝鮮語の間でというよりは、より多層的な「異重言語」的要素の間で縫合と亀裂が繰り返される状況だったと考えられる。

2. 一つの座談会、二つの記録、その間の通訳・翻訳

朝鮮・台湾・満州・中国・モンゴルなどから多数の民族が参加した植民地期の座談会は、多くの場合日本語で記録された。しかし、実際にどのような言語で行われたかは容易く断定できない。帝国の言語として日本語が強制された時さえ、実際の会話には非ネイティブであるがゆえの「異常な」日本語・朝鮮語・中国語・モンゴル語・英語・筆談言語としての漢字などが、通訳・翻訳を重ねるうちに多層的に現れていただろう。「文化列車座談会」というテキストなどはその例である。第一回大東亜文学者大会を終えての帰途、満蒙華の体表たちは、下関から釜山にわたって北上する道で京城に寄っていく。「文化列車座談会」は釜山から京城へ向かう列車の中で開催された。

この座談会は『毎日新報』に1942年11月17日から19日まで三回にわたって掲載され⁴、さらに「大東亜文学者代表交驩座談会」というタイトルで『緑旗』1942年12月号にも掲載された。後者は前者の転載であることを記しておらず、書字言語・司会者・タイトルが違って、まるで別の座談会のように見える。しかし、座談会の内容・参加者・日付を見ると、11月14日の釜山発京城行列車「あかつき」⁵の二等寝台車で開かれた同じ座談会であることは明らかである。紙面の制限ゆえ両記事をめぐる媒体間の関係や植民地的な権力関係については省くが、焦点を当てたいのは、『毎日新報』には見られず『緑旗』にのみみ表示がある「通訳：小竹武夫」の一文である。朝鮮人読者を念頭に置いて朝鮮語で書かれた『毎日新報』版テキストにも、在朝日本人を読者として想定し日本語で書かれた『緑旗』版テキストにも、本文中に通訳の明確な痕跡は見られない。通訳の痕跡といえるのは『緑旗』版に記された通訳者の名前だけだ。ところで、通訳士の名前が日本式で、座談会の開催地や発表媒体の刊行地が朝鮮だからといって、彼が日朝の通訳をしたかという、そうとは考えにくい。小竹武夫（おたけ・たけお）は中国文学研究者で、当時、京城帝国大学に通っていた。大東亜文学者大会では日本語の使用だけが許され、美しく正確な日本語は大会で始終強調されたスローガンでもあった。しかし、大東亜文学者大会にもこの座談会にも、日本語が不得手の吳瑛やバイコフが参加していた。したがって、ここでの通訳は、中国語と日本語の間で行われたと思われる。それにもかかわらず、座談会の開催地が朝鮮であり、朝鮮人が多数参加していたという点において、地名・人名などは朝鮮語で語られた可能性も高い。つまり、『緑旗』において通訳士の名とともに日本語による記録として残されたこの座談会は、それが実際には非常に多様な言語間の通訳・翻訳を経過してきたものであることを垣間見せるテキストだ。それゆえに、書字言語として強い権力を持った日本語の帝國的な位置があらわになるのである。

書かれたものと語られたものの中で消えていたこの通訳に注目することで、テキストの新たな読解の潜在性が開かれる。座談会での通訳が中国語と日本語の間で行われたとしたら、『毎日新報』掲載の朝鮮語版は、日本語の速記録を朝鮮語訳した「翻訳朝鮮語体」か、あるいは席上で日本語を朝鮮語へと同時通訳しながら記録した「通訳朝鮮語体」であろう。見たところ、『毎日新報』では11月17～19日紙上に、『緑旗』では12月号に掲載されていて、日付の上では『毎日新報』のほうが早い。ところが、通訳に注目すると、日本語の速記録が先にあり、『毎日新報』はそれを参考・翻訳・編集して掲載したと思われる。このような推測は、両テキストの文体を比べてみるともう少し明確になる。

『毎日新報』版では、性別・民族・年齢・言語が異なる参加者の間で開かれた座談会にしては、文体は安定的に整理されている。反面、『緑旗』版ではぞんざいな表現や丁寧な表現などが混在していた。つまり『毎日新報』版のほうがテキストにより強度な編集を施したものかあるいは、翻訳の課程で文体が統一されたと見られるのである。

このように、1940年代に記録されたテキストに見られる語られたものの痕跡は、時間的・言語的・

⁴ 「満蒙華 文学者代表座談会1——大東亞의 文藝復興：感銘기쁘든 半島代表의 發言」、『毎日新報』, 1942. 11. 17, 朝3面; 「満蒙華 文学者代表座談会2——西洋的인 것을 追放：大東亞 文學精神을 確立하자」、『毎日新報』, 1942. 11. 18, 朝3面; 「満蒙華文学者代表座談会3——八紘一宇의 大精神：大東亞 文學者들의 共通인 指標」、『毎日新報』, 1942. 11. 19, 朝3面。

⁵ 朝鮮総督府鉄道局編纂『朝鮮列車時刻表』、1938年2月、2頁。

民族的オリジナルが複雑かつ流動的に混ざり合った多重言語状況を示している。別の言い方をすれば、言語帝国主義は「書かれた日本語」、つまり「記録＝アーカイブ」の形でその権威を構築し語られた言語を浸食していったが、その書かれた日本語＝記録＝アーカイブには、語られたもの（語られながらも消されたもの）が常に無限な痕跡を残している。

3 「書かれた日本語」と「語られた朝鮮人の言語」、その間の「ぼかし (gradation)」

金史良の「草深し」⁶で郡守が「色伎奨励」演説をする場面は、被植民者の日本語が植民者の日本語を意図せざるうちに嘲弄した一節だと評価される。朝鮮人郡守が自らを朝鮮人大衆と区分するために下手な日本語で威張るように演説する様子を描いた場面だが、ここで金史良は、植民者の日本語を摸倣しようにも不完全なものになってしまう朝鮮人郡守を表現する修辞として、漢字にルビを付けたり誤ったひらがな表記したりしている。ところで、この場面を「書かれた言語と語られた言語との関係」に焦点を当てて読んでみるとどうか。すると、日本語／朝鮮語、植民者／被植民者の関係だけではなく、より多様な階級・出身・性格そして性別を持つ、朝鮮人の中での無限に多様な言葉に気づかされる。

「草深し」で会話を交わしているのは主に朝鮮人たちである。日本人の会話は回想の場面でわずかに登場するばかりだ。つまり、金史良は日本語／朝鮮語の関係性を語ろうとするばかりではなかった。むしろ、朝鮮人同士が交わす言語において無限の境界を往来されぼかされていく (gradation) ような言語関係が焦点化されている。朝鮮人の言語に帝国の言語がどのような分裂を起こし入り込むのか、そうして朝鮮語自体にはどのような変形が起こるのかを、日本語を活用して暴露しているのだ。これは、「話された言語 (おかしな日本語、おかしな朝鮮語、各々の民族語の内部にある地方差など)」を「書かれた日本語」へと翻訳しながら、帝国の言語の裏側に迫る実践である。

まず、郡守の日本語の演説の書かれ方を見てみよう。下手な日本語を表現した修辞法は上述の通りだが、これは言い換えれば、朝鮮人の発話した日本語をそのまま日本語で書き留めた、「生硬な直訳」(草/53) だといえるだろう。

「ええと、ちゆまり吾人は白い着物を廢止して、色を染めだ着物を着 (つあく) 用せねばならんのである」と叔夫は胸を張って泰然と後手をして御自慢の弁舌をふるつてゐる。「朝鮮人が貧 (びん) 乏になつたのは白い着物を着用しながらである。経 (げえ) 済的にも時間 (が) 的にも不経済なのである。即ち白い着物は早ぐ汚れるから金が必要、洗ふのに時間がががるのである。(暁/38)

このような発音は「朝鮮語の音韻体系が日本語の音韻体系に干渉」⁷して発生したもののだが、ここで指摘しておきたいのは漢字語を読む際に発生している発音の変形である。朝鮮人にとって日本語文中の漢字は目視で理解できるものなので、自分に馴染みのある言葉と錯覚し、発音を間違えやすい。つまり、朝鮮人の日本語発音は、朝鮮語の音韻体系によって不可避的に影響を受けるのはそうだが、朝鮮語中の漢字語の発音による影響も大きいだろうと思われる。ところで、このような郡守のおかしな日本語を「支配的日本語」へと変化させるのが、鼻かみ先生の通訳だ。通訳を境界線のように中央に置くことで、「郡守の言葉＝日本語」対「山民＝朝鮮語」という位階的対立が明確になる。しかし、作中のかれの言葉は相互に連続的な変形の構図を作っている。「山民—鼻かみ先生—郡守—仁植」という位階関係は、「沈黙—「ふるえを帯びておろおろしてゐる (39/草)」朝鮮語—おかしな日本語—大学生の日本語・朝鮮語」という言語間関係に対応している。この演説の場面は、朝鮮語と日本語との差異だけではなく、その間に位置し、互いにぼかしあいながら混ざりあい、微妙な差を生みながら無限に分裂していく言語現象を見せてくれるのである。

次に、郡守とその甥である仁植の会話を見てみよう。朝鮮人同士が日本語で対話するこの場面は、朝鮮人が日本語を使用する際の錯綜を描いている。郡守は仁植との日常的かつ私的な会話でも日本語を使っているが、例えば上官の悪口をいう時にはひそかに朝鮮語へと言葉を変える。

「君はどうして中 (ちう) 途で出て来たのかね？」

⁶ 金史良「草深し」『芸文』(朝鮮特集号) 1940年7月。以後、ここからの引用は「草/頁」で表示。

⁷ ユンデソク (윤대석) 「植民地国民文学論—1940年代前半期「国民文学」の論理と心理 (식민지 국민문학론-1940년대 전반기 ‘국민문학’ 의 논리와 심리)」『近代を読み直す1 (근대를 다시 읽는다1)』ソウル：歴史批評社 (역사비평사)、2006年、166~168頁

「蒸暑かつたもんですから」と仁植は起き上がりながら**忌々しさうに朝鮮語で呟いた**。
 「蒸暑かつた？」彼はさう**内地語で受けとつて**、「ふーむ、それで大(たい)学生、わたしの演説振りはどうぢやね。」と、につこり笑つて答を期待するやうに鶏のやうな目を据ゑた。[中略]
 「え、どうぢや、立派ぢやろが、え、だから君、わしの演説ちうのは上(ぞう)官達も認めてゐるんだよ。ちゆまりわしを雄弁家だと皆が云ひおるのだよ」それから急に首を突き出しひひひと笑つてから**今度は朝鮮語で声をひそめた**。
 「あの狐面をしてゐた内務主任はな、演説のことだけにはわしを齒がたたんで兜を脱いでゐるよ。いくら自分が内地人で上官のわしより実権があり収入も多いちうで威張るけれど、演説をするのを見ればわしの偉いところが一目瞭然と分るのぢやからな。はつははは」と後は腹をゆすぶつて笑ふのだった。(草/41～42、選集/73～74)

つまり使用言語に民族と一致しないだけではなく、会話の対象やテーマなどによって、一人物の中でも多様に変化する。すべての会話が日本語で表現されているが、金史良はその錯綜を示すために、「忌々しさうに朝鮮語で呟いた」、「内地語で受けとつて」、「朝鮮語で声をひそめた」、「格調の變な内地語で(草/51)」など、まるでシナリオのト書きのように、使用言語やニュアンス・口調・語感を説明している⁸。これは、同一の朝鮮人にあつても権力関係や状況によって使用言語自体の変化から語り口の微妙な変化まで様々な変化が起こりうることを示す。状況によって変わっていく「語られた言葉」の無限のグラデーションを翻訳したもの、つまり、「意味」の翻訳ばかりが「ニュアンス・口調・語感」を翻訳した表現だといえるだろう。

第三に、朝鮮語で行われる朝鮮人同士の会話の場面を見てみよう。仁植と鼻かみ先生の会話はテキスト上は日本語で書かれているが、物語のうちでは朝鮮語で話されている。金史良は、朝鮮人が朝鮮語で会話する場面を端正な日本語で書いている。つまり、朝鮮人同士の朝鮮語による会話を表現した日本語は、一般的な意味での朝鮮語から日本語への翻訳文である。しかし、この一般的な翻訳文としての日本語にも、やはり内部的な分裂が起こされている。東京で大学に通う仁植と鼻かみ先生の会話では標準語の日本語で書かれているが、鼻かみ先生の妻が愚痴る場面は方言風の日本語で書かれている(草/46)。方言風の日本語には、朝鮮語から日本語へ、そこからさらに日本語内の地方語へという、重層的な翻訳過程が潜んでいる。金史良が、鼻かみ先生の妻が不満を口にする場面を「演説をやり出した(草/47)」と書いたことに注目しよう。郡守におかしな日本語による演説があつたとすれば、妻には訛った朝鮮語の演説がある。

このように、植民地における言語の位階化は、日本語／朝鮮語の間だけではなく、その帝國的な言語構造を内面化した日本語の内部でも、また朝鮮語の内部でも起こっていた。この内部の分裂を巧妙に利用しながら、他方では書かれたもの、記録されたものの言語たる日本語のヘゲモニーの下に分裂の痕跡を消して統合して見せたのが、帝国主義的な言語の作動であつた。反面、金史良は書かれた言語＝日本語の深部にまで入り込み、日本語からも朝鮮語からも変化された言葉で、「朝鮮の現実」としての語られた言語を掴むための方式を創出しようとした。

朝鮮の現実を充実に書いてみたい。どれ位正鵠(せいこく)に把握できるか、どれ程眞實ある形象化が為されるか、俺には全くおつかない。精一杯努力してみるだけである。[中略]書き綴り乍ら今更弱つたのは言葉である。一そのこと文章から日本語を殺さうか等とさへ考へてみる。母国語を仮名文字で生硬な直訳に移すとしたら、果たしてどんなものだらう⁹。

「日本語を殺さうか等とさへ考へ」たとは非常に印象的だが、それ以上に「母国語を仮名文字で生硬な直訳に移す」という一文に目が向く。ここで彼が「朝鮮語」の代わりに「母国語」と呼び、「日本語」の代わりに「仮名文字」と読んだことが興味深い。実際に「草深し」で彼は、日常生活で朝鮮人が使う言葉(おかしな日本語も含めて)のそのままを仮名文字で生硬に直訳したといえる。さらに、エッセイ「部落民と薪の城一火田地帯を行く(2)」の「**も、も、動物とハンガチ(同一といふ内地式朝鮮語)ですよ**」¹⁰という一文には、日本語の影響を受けて変形した朝鮮語の発音がそのまま晒されている。

このように、「語られた状況」を創造するために現実の朝鮮人の言葉を翻訳した「草深し」の演説・通訳・会話の場面は、書かれたものとしての日本語という帝国言語が、被植民者の複雑な関係性によって無限に多様に発話されていたであろうという潜在性を浮き彫りにする。帝国の言語／被植民

⁸ 「朝鮮文化通信」『現地報告』1940年9月。

⁹ 金史良「雑音」『金史良全集IV』河出書房新社、1973年、53頁。(原本は「雑音」『堤防』創刊号、1936年6月)

¹⁰ 「部落民と薪の城一火田地帯を行く」、同上、85頁(原文は「部落民と薪の城一火田地帯を行く(2)」『文芸首都』1941年4月)

地の言語、日本語／朝鮮語、知識人の言語／大衆の言語、標準語／地方語、声／沈黙などの二項対立的関係ばかりでなく、そうした対立構図の中で、またそれぞれの項自体の内部で、発話状況に即して生まれて来る無限の「ぼかしたような」言語（草／57）を聞かせてくれる。「朝鮮人の語られた言語」が表すこれら無限の具体的な言語は、「書かれたもの＝帝国の言語＝支配言語」に入りこみ、「書かれた日本語」を奇妙な声へと翻訳している。

4. 解放空間における書かれたものと語られたもの、その間の日本語と漢字

新聞・雑誌・出版物の発行は解放後に爆発的に増加する。1945年に45社だった出版社が1948年には792社に急増し、それに伴い媒体も増えた。ところで、この時期に出版された雑誌・新聞からは日本語の痕跡すっかり消える。少し前まで日本語は出版界の支配的な言語であり、台湾では出版界における日本語から中国語への移行に一年以上かかったことと比べると、異常な速度だと思われる。しかし、「書かれた言語」ではなく「語られた言語」の変化は遅かった。言い換えれば、「書かれた言語」の混種性と漢字廃止をめぐる議論をみると、解放前後をめぐる言語の変化は、単に日本語から韓国語（ハングル）への変化だとは言い切れない。李熙昇は、解放から約一年半が過ぎたのに「国語粗雑の現象」は消えておらず、むしろ解放直後より激しくなっていると語り¹¹、多様な階級・性別・世代の言語を挙げた。

「アイツ、バカだろ。なぜそんなにキガキカナイ [음성]」
 「オッケー、どうせ足りないのは同じことさ、くそ、じゃ後で。うん。グッバイ」
 「おまえ、昨日そこに行ったか。ホンマチ。で、あの何人だって」
 「イヤヨ！ そんな言葉、二度といわないで。私は本当にイヤデナラナイヨ、ホントニ」¹²
 “아이즈 빠가란 말야. 왜 그렇게 기가 기가나이 [음성]”
 “오케이. 어차페 모자라긴 일반인데, 제기할. 그럼 이따 만나. 응. 끝빠이.”
 “너 어제 거기 갔었니? 혼마찌 말야. 그래 그 사람 무러데. 쇼오지한다구?”
 “이야요! 그런 말 다신 말어. 난 참 이야데나라나ियो. 혼또니.”

「言語の混乱・混沌」といった言い回しは、言語を論じるテキストに解放直後から頻出する。1945年11月、李克魯は「過去の日本語の根が深かったぶん、速やかな清算はできず、多数の青少年層は文字を失い彷徨っている」と語り、ハングル講習のための師範学校の設立、ハングル書籍の出版を訴える¹³。李熙昇は、日本語を使う人は「大和魂化した肉の塊にすぎず、決して朝鮮人ではない」（李熙昇／10）」と語り、無自覚的な日本語使用を批判する。解放直後、韓国語を国家の支配言語として設立していく過程でこのような批判が現れたことは理解しやすい。ところが、日本語の清算以上に議論されたのが「漢字閉止」をめぐる議論であったのは興味深い。

1945年1月15日に創刊され、その後も長く刊行され発行部数が三万部を突破した雑誌『新天地』創刊号には、「漢字廃止と横書き」の可否を各界の著名人に尋ねる設問が掲載されている。一緒に掲載された他の二つの設問が植民地期の過去清算や新たな政府樹立に関わるものであったことから、漢字廃止もそれらと並ぶほどの重大なアジェンダであったことがわかる¹⁴。漢字廃止に反対する意見は、漢字が韓国の伝統に深く根付いており、ハングルだけでは思想と文化を真に表現できない（林和、白南雲など）といもうので、賛成意見は、私たちの言葉を使わなければならないという当為論とハングル学びやすさにより文化・知識の取得に効果的という実用論があった（咸尙勳、盧天命など）。中道論は漸進的な実用化を主張した。その他にも階級論的な視点を持つ漢字廃止論など¹⁵、論調は様々だが、前述した主張から大きく離れるものではない。とりわけ目につくのは、漢字廃止論言説における日本への言及の仕方である。日本ではすでに漢字を廃止しローマ字を使い始めているとし、早く漢字

¹¹ 李熙昇, 「国語醇化問題」『白民』3巻1号(通巻6号)1947.1、10頁。引用に際しては「李熙昇／頁」と表示。

¹² 李熙昇, 「国語醇化問題」『白民』3巻1号(通巻6号)1947.1、9頁。原文で、日本語の発音がハングル音写されている箇所や、英語の発音がハングル音写されている箇所は、片仮名で表記した——引用者。

¹³ 李克魯, 「朝鮮語学会の任務(朝鮮語學會의 任務)」『民衆朝鮮』創刊号、1945.11、44~45頁。

¹⁴ 「設問」『新天地』創刊号、1946.2、30頁。

¹⁵ 崔瑠淳「漢字廃止論」『新天地』1946.2、63頁。

を廃止しないと再び植民地に陥ると警告する者もいた¹⁶。

このように漢字廃止論が話題の中心になった理由は、まず朝鮮語学会の活動と関連している。朝鮮語学会は解放後の初事業として9月23日に「漢字廃止会」を發起し、11月30日に成立する。漢字廃止会は「小中等学校教科書での漢字使用を廃止することを軍政庁学務局と教育審議会に建議し、その後も公文書と鉄道駅名からの漢字追放を断行するなど、広く運動を展開していく志」のもとに組織された¹⁷。ところで、なぜ朝鮮語学会の重大な初事業が日本語清算ではなく漢字廃止会の成立であったのか。漢字廃止に反対論をみると、解放直後の混乱した言語状況で、「書かれた文字としてのハングル」には日本語よりも漢字が根深く影響していると認識されていたことが確認できる。漢字廃止運動の先頭にあった崔宗煥を訪ねた記者は、その探問記の最後にこう記している。「結局、崔宗煥氏の話は漢字混じりでしか書けない記者の無知をお詫びいたします」¹⁸。鄭寅普は飛行機を「飛ぶ杵(날뜰, ナルトル)」と言い換えるとそのものの語感を伝えられないという具合に、漢字は、私たちの言葉ではないからと言って除去するにはあまりにも大変なほど私たちの言葉と化してしまった」と語る¹⁹。『朝鮮教育』1947年6月号は「国語・国史特集」を組んでおり、漢字廃止が教育現場で引き起こした問題について論じている。李崇寧は、漢字廃止論と朝鮮式の言語改造論が推進されたら、新聞雑誌も読めず数学などを学ぶ際にも辞書が必要な「人為的な第二の文盲」が生じると批判する²⁰。趙潤濟は小中等部で漢字教育が廃止されたことに憤懣をぶつけて、子どもたちが日常生活に必要な漢字も読めなくなったらどうするつもりかと反問する²¹。このように、反対論に現れている、書かれた言語として根付いた漢字の位置は印象的である。つまり、ハングルの書字言語としての定着にとって妨げとなるのは、現に書かれた言語の基盤になっている漢字であった。ある意味で、韓国の言文一致は近代啓蒙期に限定される話ではなく、解放後も試みられながら果たされず、今現在も果たされていないのかもしれない。

ところで、日本語廃止論と漢字廃止論を並べてみると、日本語は主に語られた言語と関連付けられ、漢字廃止論は主に書かれた言語に関わっていると思われる。解放後に出された小説の中で、日本語と漢字がいかにか表現されていたのかを見てみよう。安懷南は植民地期に炭鉱に徴用された唯一の作家であり、解放後にその経験を小説化している。その小説には九州の炭鉱から朝鮮へと移動するまでの経験が書かれていて、言語の面でも、朝鮮語・日本語・漢字などの表記が様々な権力関係の中で変化していく様子をうかがうことができる。そうした作品の中から「鐵鎖切られる」²²を見てみよう。

八月十五日、[中略] 六時の太鼓の音とともに早々にイブハン(入坑)をした。[中略] ハンウエ(抗外)では「ビリビリビリ……………」という音とともに[中略] ブンクァンギ(分鐘器)が動いて、ハコが穴の中から次々に飛び出てきた。

(鐵鎖/161、下線と翻訳は引用者による。日本語がハングルで音写された部分や、外来の漢字語彙を韓国語式の読み方で表記したものと判断される部分は片仮名で表示)

八月十五日, -중략- 여섯시 북소리와 함께 부랴부랴 입항(入坑)을 했다. -중략- 항외(坑外)에서는 「들들 들……」 소리와 함께-중략-분광기(分鐘器)가 움직이고 하코가 연해 굴 안에서 쏟아져 나오고 하였다. (철쇄/161쪽, 밑줄은 인용자)

韓国語が支配言語になった時、日本語はハングルで音写され、外来語として傍点付きで表現された(例: 하외)。日本式の漢字語や見慣れない漢字語などは、訓読をし意味を括弧のなかで漢字で書いた。日付や地名は漢字表記であった。

勞務課の捜査主任であるタシロ(田代)が膨れあがった顔で、息を切らしながら入ってきた。[中略] 1) 「ニボンハ、ムジョウケンコーフクダ! イイカ!」と言い、目玉をぎよろつかせる。[中略] 2) 「いいか?」田代が聞いた。「いいか?」「……………」。ソグンは返事が出来なかった。もし返事をしたら、一気に棒が頭に打ち下ろされるだろう。しかしまた、この上なく喜ばしいこの情報を否定するのは死ぬより嫌だ。3) 「どうだ?」「日本が負けたぞ!」「いいか?」[中略] 4) 「チョウセンジンハ、ワカラナイナ……ヘビノヨーナ

¹⁶ 崔鉉培「日本で漢字が使われなくなりはじめた(日本서 漢字 안쓰기를 시작하였다)」『朝鮮教育』第1巻2号、1947. 6、10頁および15頁。

¹⁷ 「時事解説—漢字廃止運動の展開(時事解説—漢字廃止運動의 展開)」『先鋒』第2巻第2号、1946. 2、37頁。

¹⁸ 「探問記—漢字廃止運動の陣頭に立った崔宗煥氏(探問記—漢字廃止運動의 陣頭に 선 崔宗煥氏)」『民衆朝鮮』創刊号、1945. 11、51頁。

¹⁹ 鄭寅普「漢字廃止に対して(漢字廢止에 對해서)」『新天地』1946. 2、67頁。

²⁰ 李崇寧「国語教育界の課題(國語教育界의 課題)」『朝鮮教育』第1巻2号、1947. 6、48頁。

²¹ 趙潤濟「国語教育における漢字問題(國語教育에 있어서의 漢字 問題)」『朝鮮教育』第1巻2号、1947. 6、69頁。

²² 安懷南「鐵鎖、切られる(鐵鎖 끊어지다)(一回)」『開闢』復刊、1946. 1。以後、ここからの引用は「鐵鎖/頁」と表記。

ヤツダ……」(朝鮮人は分からないね……。蛇のようなやつだ……) と呟きながら、まるで塀を越えるようにそっと出ていった。

(鐵鎖/162~163. 紙面の制限があり原文の改行は無視した。番号と下線は引用者による。また、原文が日本語の音写である箇所は片仮名で、原文中に括弧付きで挿入されている漢字は斜体で表示した。)

노무과(勞務課) 수사주임(搜查主任) 으로 있는 다시로(田代)가 얼굴이 통통부어갓이고, 헐레벌떡어리며 들어왔다. -중략- 1) '니홍와 후초갱고-후꾸다!' '이이까?' 하고는 눈알을 부라리었다. -중략- 2) '좋은냐?' "다시로가 물었다. '좋은냐?' '.....'" 서군은 대답을 못했다. 만약 대답을 하면, 답박에 몽둥이가 머리를 치리라. 그러나 또, 한없이 반가운 이 소식을 부인(否認)하기는 죽기보다 싫다. 3) '어떻냐?' '일본이 졌다!' '좋지?' -중략- 4) '초센칭와 와까라나이나..... 헤비노요-나 약쓰다' (조선놈은 음흉해, 배 앞 같은 놈) 중얼거리면서 그야말로 구렁이 담넘어가듯, 슬그머니 나갔다. (철쇄/162~163, 지면관계상 줄바꾸기는 무시함. 또한 번호 및 밑줄은 필자에 의함.)

「タシロ」は日本語の読みが音写され、傍点を付されて外来語として記された。奇妙に映るのはタシロの台詞である。1) は、日本語の発音のままでハングルで音写され、傍点を付けられてた。2) と 3) は、1) の日本語の訳文というべき韓国語である。4) も日本語音写で、傍点が付されている。さらに括弧書きで朝鮮語訳が置かれている。これらはすべて書字言語はハングルである。だが、テキストを見ずに音として捉えるならば、日本語と韓国語が混在している。この現象については、植民地期の支配的な言語である「日本語」から解放期の支配的言語である「韓国語・ハングル」への移行、そこに見られる差異と同一性、根深い漢字との関連性、特定の日本語が漢字化した現象(その逆も)などを議論しなければならないが、ここでは紙面の制限のため省略する。ただ、書かれたハングルの痕跡として表れている語られた言語の多層性を指摘しておきたい。

ここまで、植民地期末から解放後直後までを概観し、書かれた言語と語られた言語との縫合に生じた綻びの痕を追跡してみた。この作業により、植民地期の二重言語使用における日本語と朝鮮語の階層的な関係を念頭に置きながらも、朝鮮語と日本語の内部に起こった無限のぼかし(書かれたもの/語られたもの、階級・民族・性別・時代・状況・会話の相手などによってちがってくる)を、その分裂的な権力関係とともに示そうと試みた。

今後取り組みたい課題としては、解放期に、書字言語が日本語から韓国語・ハングル)へと急速に変わり、言語の混種性が害と見なされるなかで、日本語の清算よりも漢字廃止論で焦点が当てられていたという問題が興味深い。日本語は語られた言語として、漢字は書かれた言語として、韓国語・ハングルの中に混在していたわけである。したがって、解放期における言語の変化を、二つの民族語(日本語から韓国語へ)間の関係においてのみならず、書かれたものと語られたもの関係において、固有名や呼名などの言語の内部の差異に注目し、さらに日本語に加え漢字・英語などより広い範囲の言語関係を意識して検討する必要性を感じる。